

新選落語集

玉川一郎編



金園社

新選落語集

玉川一郎編



金園社



新選落語集
《目次》

なつかしのくるわ編

明鳥

ミイラ取り

山崎屋

五人まわし

付馬

お見立て

錦
の
け
さ

三枚起請

まぬけ泥持

まぬけ泥棒出没編

芋
ど
ろ

穴
ど
ろ

出
来
心

や
か
ん
泥

お
血
脈

もぐら

三三三三三二二二二一一一一一
五四二一〇四四一〇八七五四三二二





応挙の幽霊

そばの羽織

もう半分

金魚の芸者

ナンセンス
哄笑編

錦
明
竹

たちね

熊
の
皮

万金丹

てんしき

道
灌

一
目
上
り

壽
限
無

松
竹
梅

提灯屋角力

おとぼけ人物活躍編

新宅祝
い

天災

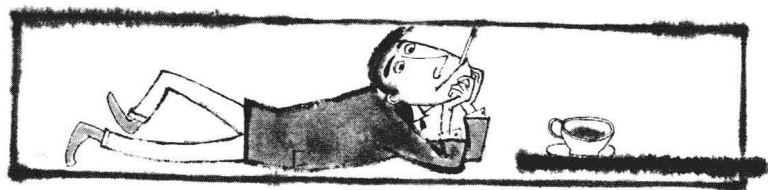
一〇〇〇九九九九九九九九八八八七七七
〇二二〇九八七六五三二一八二二〇九八七六





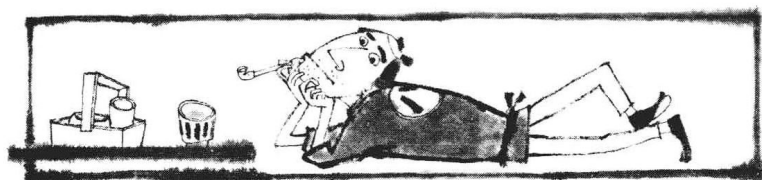
鰈	ねずみ穴	わら人形	おすわどん	心眼	佃祭	文七元結	人情ばなし鑑賞編	太鼓腹	つるつる	鰻のたいこ	道具屋	二十四孝	子褒め	酢豆腐	既火事
酒とたべもの編															
一六四	一五九	一五六	一五四	一五二	一五〇	一四七	一三〇	一二八	一二六	一一八	一一六	一一五	一一四	一二二	一一一





花見酒	二番煎じ	ずっこけ	親子酒	本膳	時そば	後生うなぎ	饅頭こわい	試し酒	尻餅	間男とジェラシー編	紙入れ	りんきの火の玉	松山鏡	ふろしき	包丁	りんきのこま
一六四	一七四	一七五	一七六	一七七	一七八	一七九	一八〇	一八二	一八三	一八六	一八六	一九四	一九五	一九六	一九七	一九九





商店街は花ざかり編

味 噌 庫

六 尺 棒

茗 荷 宿

口 入 屋

あんまのこたつ

お殿様と侍ニッポン編

妾 馬

た が や

目黒のさんま

そこつの使者

敵 流 島

敵 討 屋

将棋の殿様

火 焰 太 鼓

お好み新作編

表 札

取 次 電 話

二〇一

二〇一

二二二

二二三

二二四

二二五

二二八

二二八

二二九

二三〇

三三一

三三二

三三三

三三四

三三六

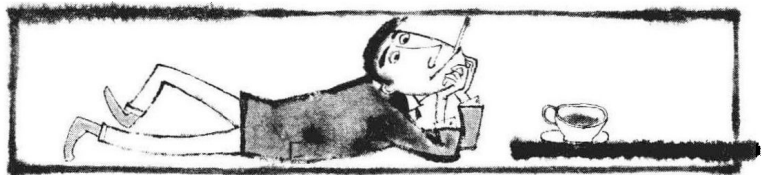
三三八

三三八

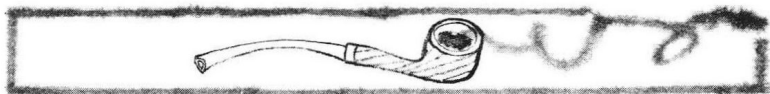
三三八

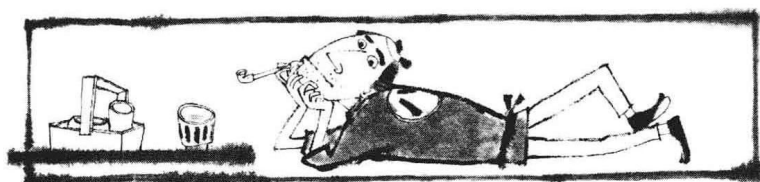
二四七





子	宝	二四九
旅行	靴	二五二
江戸小ばなし傑作選		
前か後か	四	
筆のあやまり	九	
タコ	一〇	
赤貝	一二	
借りもの	一四	
仁王	一七	
すりむき	一七	
市松	二二	
番町皿屋敷	二三	
駕籠賃	二七	
のっぽの使い	三〇	
もう大丈夫	三一	
格子	三二	
さい	三三	
壺	三三	
酒かす	三三	
体がもたぬ	三四	
適在	三五	
毛羽織	三五	
娘の病氣	三七	
ようなもの	三七	
弱い亭主	四一	
間男代金	四三	
夢	四三	
寝顔	四五	
小便	四五	
寝小便	四九	
猫男	五〇	





後	家	五
小	野道風	五二
礼	儀	五三
く	せ	五四
地	震	五五
嫁	の乳	五七
試	験	五七
遍	照金剛	六一
さ	つま芋	六三
く	わい	六三
夢	の女	六三
幽	霊失格	六三
家	風	七〇
し	の字嫌い	七一
長	命丸	七一
の	み	七三
大	男の毛	七七
し	まった	七八

お	札詣り	八
泥	棒	八五
狸	のお参り	八五
い	やな野郎	八五
ほ	りもの	八六
神	前	八八
し	きたり	八八
妾	の条件	九〇
女	房の代理	九〇
看	病	九二
人	さまの女房	九四
煙	管入れ	九七
夫	婦げんか	一〇五
比	丘尼	一〇五
物	入り	一〇七
さ	かやき	一〇九
妾	他多数	一〇九

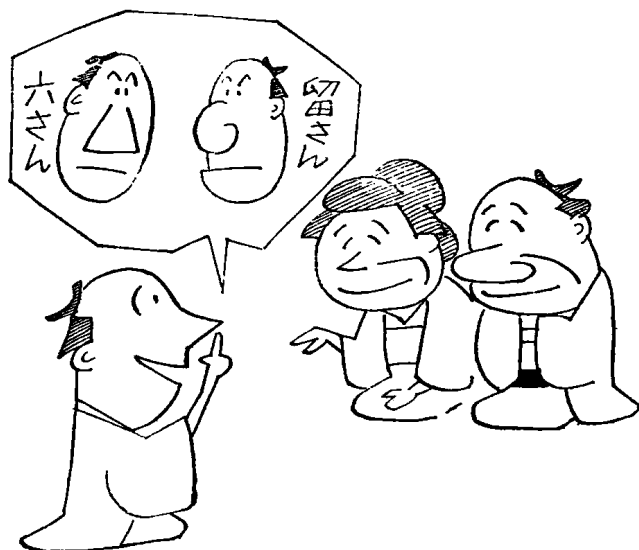


新選落語集

玉川一郎編



金園社



明 (あけがらす) 鳥

ダダをこねての末のお
籠りも一夜明くれば：

世の中には食わず嫌いというお方が、いくらでもございます。食ってから、あれは嫌いだというのなら仕方ございませんが、食べないで嫌いだというのは、少々困ります。
×「どうも牛はいけませんよ。あの足のブラ下がつているところを見ると、とっても食う気になれませんねエ」
などといいます。

△「中村さん、今、親戚から軍鶏^{しんけい}を買ったんですが、ちょうど煮えているところです。ひとついかがです」

中「それは結構ですな。私はね、牛は大嫌いなんです、軍鶏とくると、大好物なんです。結構ですな、遠慮なく頂戴しましょう。じゃアご免を蒙って箸を突っ込みますよ。ううん、これは旨いね」

△「旨うございますか？」

中「ええ、いい味ですね」

△「そうですか。実は、これはお前さんが、普段嫌いだ、嫌いだといっている牛肉なんだが」

中「へえー、これが牛なんですか。これなら好きだ」

というあんばいです。それなら、早く食べた方が良さそうなんですが……。中にはまた女嫌いというお方もいらっしやいます、勿体ない話で……。男と生まれて女を嫌う方はいし、また、女と生まれて男は大嫌いという方もあるから、世の中は不思議でして。手前どものお客様で、普段から、俺は女は嫌いだ、とおっしゃっている方があります。或る時、その方のお宅へ伺いますと、たくさん子供衆がいますので、

芸「旦那様」

且「何だ」

芸「お子供衆がたくさんいらっしやいますが、これは皆、親類か何かのお子さんで……」

且「いや、家の子供だよ」

芸「さようでございますか。それにしても、たくさんお貰いになすったもので」

且「貰ったんぢやア、ありませんよ。皆んな俺の子だ」

芸「あなたのお子様……、とおっしゃいますと、あなたの奥様の……」

且「そうだ」

芸「へえー、あなた何ですね、普段女は嫌いだ、嫌いだとおっしゃっておりますが……」

且「君の前だがね、女なんぞは見るのも嫌だよ」

芸「へえー、さようでございますかね。女は見るのも嫌いだ、ね。そんなあなたに、何でこんなにたくさんの子供衆がいられるので」

且「女は嫌いだが、女房は好きだ」

じやア、同じことですが、こういうのも出ますと、話の種になります。

世の中は様々でございますが、子を思う親の心に変わりはないと申します。子供衆が、道楽なれば親御さんのご心配遊ばすのも無理がございせんが、あまり温和し過ぎるのも、またご心配の種です。

父「婆さんや」

婆「はい」

父「ちよっとこちへ来なさい。あのね、他でもないんだが、倅のことだがね。全くあの子には苦勞させられますよ。他の子は石を投げたり、棒千切を持って喧嘩したり、乱暴はしたりで苦勞するが、それは苦勞のし甲斐がありますよ。家の倅は、人様が乱暴な遊びをすると、隅の方に縮こまって青くなっているやがる。暇さえあれば、青表紙を揚げやがって、子曰って、火の玉ばかり食ってやがる。火の玉を食った

ら、少しは顔が赤くなるかと思うと、だんだん蒼くなりやアがる。あれじゃア身体に毒だよ、ねエ。少しは大きくなったから、女郎買いでもするとか、芸者を揚げて遊ぶとかすりやアいいんだが、背ばっかり大きくなりやがつて、あれぢやア、固過ぎますよ。まるで堅餅の焼さましみたいなもんだ。

この間もね、あんまり家にばかりいないで、少しは遊びに行ったらどうだ、と金を渡したらね、何んだかんだと理屈をこねて、遊びに行かないんだよ。あんまり家にばかり閉ぢ込んでいるからね、今ちょっとお使いにやっただが、どういふもんかねエ」

伴「お父つあん只今、おっ母さん只今」

父「おや、もうお帰るかえ、大そう早いね。ご苦労さん。で何といったね」

伴「先様でも宜しくと申されました、四、五日内に何うとおっしゃっていました」

父「そうかえ、ご苦労ご苦労。どうだえ、その足で湯にでも入ってきたら」

伴「有難とうございます。ただ今、ちょっと横町を通つて来ましたら、お稻荷様の初午はつごでして」

父「そうそう、今日は初午だねエ」

伴「それで、ちょっと参詣してまいりました」

父「ああ、そうかえ、それは結構だ。どうだった」

伴「大変に賑やかでした」



前か後か

おいらん、夜中に客の傍でどえらいヤツを一発やったので、あわてて客の様子をみると、イビキは

かいているが、どうやら醒さ醒入りらしい。どうも気になるので、肩をゆすぶつて起こし、
「チョイと起きてくんまし」
「何だい、びっくりさせて」
「いえね今の地震に気がついた」
「へえ、地震だつて、知らなかった。そりやア屁の前か、後かい」

父「そうかえ、何か面白いことでもあったかえ」

伴「へえ、大変に地口ぢぐち行燈ぎやうとうが掛つておりまして、いろいろな絵や文句が書いてございます。その中に、鼻高きが上にとんび鳥という文句がありました、あれは実語教の中にある山高きが故に尊からずの間違いじゃアないかと思いましたが」
父「間違いは良かったね。あれは間違ひじゃアない、それが地口なんだ。まあ、お前さんには、まだその味わいは判らないだろう。結構、結構」

伴「お参詣をしておりますと、伊勢屋のご主人が出てまいりまして、これは地主の若旦那、ようこそ参詣で。つきましてはお赤飯を差し上げますというので、ご馳走になってまいりました」

父「好い若え者が、稻荷祭へ行つて、お赤飯なんぞ食べてきちゃア困るじゃアねえか」

伴「あまりお煮が旨うございましたのでお代り致しまし

た」

父「おやおや、重ね重ねだね」

伴「それから帰る途中、角のところでは源兵衛さんと留さんがおりまして、どちらへといひますから、お稲荷様へご参詣をした戻りだといひますと、それはそれはご奇特なことで、我はこれから浅草の観音様の後ろにある黒助稲荷へお籠りに参りますが、若旦那と一緒にしませんかと申しますから、父母います時は遠く遊ばず、遊ぶに必ず法ありと申しますから、家へ帰ってちょっと両親の許しを受けて参ります、といひてきました、行って宜しいございませうか」

父「なに浅草の観音様の後ろの黒助稲荷？　そういうのがあったかなあ。黒助稲荷へお籠りねエ……。源兵衛さんに留さんねえ。ああ判った、黒助稲荷とはうまいねエ。ああ、結構だよ、行っておいで。お父さんもよくお籠りに行ったもんだよ。あのお稲荷様のご利益は顯著だからねエ。俺なんぞ、若い頃には毎日お参りしたもんだ。行っておいで、行っておいで」

伴「へえ、じゃあお籠りでございますから、小僧に夜具でも背負せて連れて参ります」

父「夜具を？　ああ、そんなことは心配しなくてもいいよ。

向うには立派な寝道具が用意してあるからね。しかし、その服装じゃアいけねエ、いい着物を着て行きなさい。おい婆さん、笑っていねエで、着物を出してやんな」

伴「いえ、お籠りですからいい着物なんぞいりません」

父「黙ってお父っあんのいうことを聞きな。ああ、それから中継ぎをするだろう」

伴「中継ぎと申しますと」

父「中継ぎというのは、お参詣に行く途中、何処かの小料理屋へちょっと上って、一杯やって行くのだ」

伴「ああ、さようでございますか。私はお酒が嫌いですから、それはよしませう」

父「それがいけねえ、っていうのだよ。お前はつき合ひといふことを知らないから困まるんだ。飲めなくっても、一杯くらいは飲みな。それから先は嫌だと思つたら、飲んだ振りをして盃洗へこぼしてしまえばいい。それから、向うで酒を飲んでる内に、一人でご飯を食べてしまつたりしちゃアいけねえよ。お酒を飲み終るまで待つて、一緒にご飯を食べるよりにしなさい。そうして、お前さんが蔭へ女中を呼んで、勘定をスツカリ払つてしまふんだよ」

伴「へえ、私だけ勘定いたしますか」

父「そうじゃアない、三人分するんだよ」

伴「さようでございますか。三人分勘定いたしましたして、後で割り前を取りますので」

父「割り前なぞ取っちゃアいけねエ。あの人達は町内で札付きの悪い連中で、金箔付きの巾着切だ。あの人達に勘定されてみる、後でどんな目に遇うか知れない。後は二人に頼んで

おけば、いいようにお籠りをさせてくれますから。ああ、着物はいいかい。お金も三十円ばかり持たしてやんな」

伴「いいえ、お賽銭なら、ここに二十銭ございますから」

父「いけませんよ。二十銭や三十銭のお賽銭では。あのお稲荷様は衣服が悪かったり、お銭が少なかったりすると、ご利益の薄いお稲荷様だからね。お賽銭をたくさん持って、立派に着飾って行くところですからね」

伴「さようでございますか。では行つてまいります」

父「ああ、ゆつくり行つていい」

親というものは有難いもので……。お話し変わりました、

こちらは源兵衛さんに留さん。

留「おい、行こうじゃアねえか。いつまで待たつて来やしねえよ」

源「いや、もう少し待ちねえ、大丈夫来るから。実は、この間親父に頼まれたんだから」

留「いくら物の判つた親父だって、伴を女郎買いにやるもんか」

源「まあ、もう少し待ちな、ここに立っていたからって、入費が掛るわけじゃねえ」

留「当り前よ、往來に立って入費を取られて堪るかってんだ」

源「そうボンボンいうなよ。ホウラ来た、来た」

留「おッ、なるほどだいぶ服装が改っているじゃアねえか」

若「お待ち遠さまでございます」

源「若旦那、大層おめかしで」

若「親父が好い方の着物を着て行けと申しますので」

留「驚いたねえ。あなたのお父さんは苦勞人だ」

源「それじゃア、出掛けましょう」

若「あなた方は途中で中継ぎをなさるそうでございますね」

源「えっ、中継ぎ。こりゃアどうも恐れ入つたね。なかなか隅へ置けませんよ。どうでエ留さん」

留「実は我々もその下心がありましたんで、何処でやりましょう」

源「そうさなア。やつぱり岡田がいいだろう」

留「そう、じゃア岡田で一杯飲りましょう」

若「惣菜と申しますと、やつぱり油揚げか何かで」

留「そうじゃアない。お前さんは黙っておいで……。姐さん、何処か静かなところへ案内しておくれ。お銚子を直ぐに……。ああ、肴は見つくりいいいや……。さあ若旦那、一杯お飲んなすって」

若「いえ、私はお酒が嫌いでございます。ですが、つき合いですから、一杯だけ頂きます。それから後は、皆んな盥洗へ明けてしまいます。それから、あなた方が飲んでいらつしやる間は、決してご飯を食べませんから、どうぞ、私にお構いなくお飲みになって下さい。お待ちいたして、ご一緒に食べます」

源「こいつア恐れ入った。それじゃアおちおち飲んでいられねえ。いい加減に切り上げて飯にかかろうか」

若「それから、お勘定の方は、私が女中を蔭に呼んで三人分払いますから」

源「そいつはいけねえ。そんな心配してはいけませんよ。勘定は私が払いますから」

若「いえ、それがいけないのでございます。あなた方は町内で札付きの悪い連中だから、あなた方に勘定されると後が恐いと……」

留「おいおい冗談じゃねえ、人聞きが悪いじゃアねえか」

源「まあ、いいよいいよ。ここは一つ若旦那にまかせようじゃアねえか」

腹ごしらえをしたあと、時間が早いからというので、ブラ歩きながら、土手八丁から見返り柳、大門を入ると、両側はチリカラタッポの大陽気でございます。

留「さあ若旦那、そろそろご境内へ掛りましたぜ。これが大門で」

若「あのう、お籠りの稲荷のお鳥居はどこにございます」

留「お鳥居なんぞは、どうでもいいですよ。仲の町の通りですぜ」

源「若旦那、ここに並んでいるのが、お宮さんです。どうです」

若「へえー、皆んな通る方はお籠りをなさるんでございます

